

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第二十八回）

まつちやま

「真土山」

・真土山（標高約100m）は都があつた大和国と紀伊国との国境の峠の山であつた、現在の奈良県の南西部にある五條市上野町から和歌山県北東端の県境付近の橋本市隅田町真土にわたる小山を云う。
・万葉集には飛鳥や奈良の都から紀伊を訪れる天皇の行幸にお供した官人が、これから訪ねる異国への憧れや、家で夫の帰りを待つ妻の想いなどが交錯する峠である国境の山として真土山（信土山とも記される）の感慨を詠んだ次の歌がある。

「大宝元年辛丑秋九月、太上天皇、紀伊国に

幸す時の歌」

あさも

きひととも

1) 麻裳よし 紀伊人羨しも

真土山 行き来と見らむ

紀伊人羨しも

つぎのおびと

おおみ

作者・調首 淡海（巻一―五十五）

（解説）

「紀伊の国の人はいらやましいな。真土山をいつもいつも眺

められる紀伊の国の人は羨ましい。」

・この歌は題詞等によると大宝元年（七〇一）の九月に太上天皇（持統天皇の譲位後の称号）が紀伊国（現・和歌山県）へ行幸の折にお供する「調首淡海」という官人が、国境の山「真土山」を通るとき、これから訪れる紀伊国へ足を踏み入れることへの期待に胸をはずませて詠った歌であろう。との説がある。

・「麻裳」は昔、紀伊国では、よい麻衣ができたので「紀伊（国）」にかかる枕詞となったとする。

「後れたる人の歌」

あさも
2) 麻裳よし 紀伊へ行く君が 信土山
ま つけやま

け ぶ
越ゆらむ今日そ 雨な降りそね

卷九―一六八〇

（解説）

「紀伊の国に付き従った、あの方が、今日は、いよいよ国境の真土山（信土山）を越える日だわ、雨よ降らないでおくれ、」

・この歌の題詞の「後れたる人」とは旅に出ず、後に残された人、すなわち家で待つ奥さんのことを指す。このことから天皇の行幸にお供した官人の家に残った奥さんが夫の旅の無事を祈っている歌であろう。

（参考文献）村瀬憲夫著「万葉の歌」新潮日本古典集成等

(写生地)

奈良県南西端の五條市上野町から大和(奈良)と紀伊(和歌山)の国境(県境)にある真土山と遠景に幾重にも重なり合い、稜線がすばらしい吉野・紀伊の山々を描く。(池田杏花)

